



# 愛隣幼稚園..... 園だより .....11.11月号

## ふと、目にした朝の光景

先日、通勤途中の車の中から嬉しい光景を目にしました。

定時より少し遅くなったな・・・、と少し焦る気持ちで車を走らせ大きな交差点まで来ると、運悪く信号は赤。あ～この信号、ちょっと長いんだよな～そんな事を考えて視線を移したその先には、毎日、この交差点で登校してくる子どもたちに声を掛けて下さっているセイフティーウォッチャーのおじさんの姿がありました。時間帯はもうそろそろ学校の始業のベルが鳴る時刻。子どもたちの姿はもう交差点にはありませんでした。この方は登校してくる子どもたちと、毎朝信号待ちの間にじゃんけんをしたり、ハイタッチしたり、おしゃべりしたり。笑顔で挨拶を交わされる様子は、子どもたちとの朝のひとつを楽しんで下さっているように感じていました。その日、おじさんはそろそろ帰るところだったので、いつもいる場所の反対側に立って遅れてやってくる男子中学生に視線を送っていました。まだ交差点からは遠いところを歩いていた男の子でしたが、視線を送るおじさんに気付いたようです。おじさんが先に大きく手を振りました。それに応えるように男の子も大きく手を振り返しました。おじさんは彼が横断歩道を渡ってくる先の歩道へ移り、信号が変わって彼が道路を渡ってくるのを待っていました。遅刻すれすれでしょうか。でも道路を渡ってきた彼は笑顔でおじさんとハイタッチ、言葉を交わして校門の方向へ足早に去って行きました。たったこれだけのことでしたが、私の焦る気持ちがふっと緩み優しい時間が流れたような気がしました。同時に遅刻すれすれにやってきた彼の気持ちを想像しました。ひょっとするといつも遅い彼なののでしょうか？それとも、今日に限って何か理由があつてのことでしょうか？いずれにしてもそれまでの彼の気持ちが緩んだことは、その笑顔から見てとることができました。小学生の頃から通いなれたこの道で、毎朝おじさんと挨拶を交わすうちにこんなステキな関係になっていったのでしょうか。

今はまだ、親の手をしっかり握って離さない子どもたちも、やがて親の手を離れ一人で歩きだしていきます。最初にはっきりとそう感じるのは小学校に入学した時です。玄関で「いってらっしゃい」と送り出せばあとはもう親の管理下にはなくなるのです。幼稚園の頃とは違い子どもの世界は見えなくなっていく。これが中学生ともなれば益々子どもの世界はシークレット。親などは「お出入り禁止」の張り紙と共に蚊帳の外へ追いやられます。もう手も足も出せません。にもかかわらず、彼らには思春期の嵐が吹き荒れるのです。たくさんいたはずの仲間から孤立し、自分で拒絶した親の助けも借りられず、ひとり立ち往生する時、程よい距離に笑顔でさりげなく繋がっていてくれる大人の存在は、彼らの大きな支えになるはず。足の重い朝に、何も聞かず何も言わず、ただ笑顔で自分がそこを通るのを待っていてくれた。その背中に無言のエールを送ってくれた。小さな繋がりのように見えるけれど実はこんな関係が、そののちの彼のあり様を大きく左右するものになるかもしれません。わが娘もそうでした。私の手に負えず自分でもコントロールが効かない時、ただ黙って話を聞いてくれる近所のおばさん(私の友だち)が大事な存在でした。“親だけでは育てられない”そう思い感謝でした。“あなたのことを見ているよ、応援しているよ”と声には出さなくても、地域で会う子どもたちに無言のエールを送る、近所のおじさん・おばさんになるのもいいなあと思います。やがて我が子も、親ではない大人に支えられる時がやってくるのです。